少年少女の健全な性的成長を守れ！

kodomozurumuke

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

【作品タイトル】
少年少女の健全な性的成長を守れ！

【Ｎコード】
Ｎ６４３７ＢＵ

【作者名】
ｋｏｄｏｍｏｚｕｒｕｍｕｋｅ

【あらすじ】
法律によって自慰行為が全面禁止された時代に生きる少年少女の苦悩を描きます。

法律概要

＜少年少女の過剰な性欲を助長する自慰行為は男女ともに禁ずる＞

２０　年、「少年少女の健全な性的成長に関する法律」が国会を通過した。その中に上記の一条が加えられた。そして項目１・２として

＜自慰行為防止のため、満１０歳を越えた男児全員に包皮切除を施す＞

＜女児が自慰行為を行っている場面を保護者あるいは教育者が発見した場合、陰核等切除を施す＞

と書かれていた。

具体的な項目は別途定められていた。男児の場合、満１０歳を越えていれば指定の病院で個人的に包皮の切除を受けることが認められていた。この場合は麻酔をしない場合でも有償であり、麻酔を追加した場合は３０万円以上となっていた。そのため多くの男児は小学校６年生の４月に学校ごとに行われる集団包皮切除式に参加する。執刀医師のサインが入った包皮切除証明書は高校入学時に公立・私立問わずすべての学校が義務づけていた。中には病気を理由に包皮切除を逃れる男児もいるが、結局は高校に入ろうと思うならば受けなければならず、一人だけ包皮が被っているのは中学生時代にかえっていじめの対象となってしまう。包皮切除は中途半端なものではなく、亀頭に包皮をかぶせることが出来ないよう短く切ることになっていた。もっとも今後の成長期を前に短く切りすぎてしまうと将

来痛みが続くこともあるため、今後の成長と勃起率を考えた慎重な切除が必要である。そのため、この施術ができる医師は特別な資格を必要としていた。陰茎のうち、もっとも敏感な部分に包皮をかぶせないようにすることで自慰行為を予防することができる。事実、この法律が施行されてからというもの、男児の日課ともいえる自慰行為をする者はほとんどいなくなった。包皮がないことに加え麻酔無しで切除された痛みが自慰行為への関心をなくしてしまう。それでも自慰行為を覚えてしまい万一保護者に発見されてしまった場合はすぐさま病院に連れて行かれ、投薬療法が行われる。場合によっては亀頭へのお灸や性欲を減退される注射が施される場合さえある。

女児の場合、予防のための措置は行われない。しかし万一にも発見されてしまった場合には厳しい処置が待っている。女児の場合は陰核を覆う包皮を切除すればかえって性感を刺激してしまう。自慰行為を防止するためには最終的には陰核そのものを切除するしかない。男児の陰茎は切除すれば排泄行為もできないが、女児の陰核は切除しても生殖や排泄には影響がない。かといって切除する痛みや身体への負担は包皮とは比べものにならない。それゆえ予防でなく、罰則としての切除になった。保護者や教師などによって発見された場合、すぐ病院へ連れて行かれる。1回目は厳重注意と警告で終わるが、2回目は直接陰核へお灸が据えられ、軽度のやけど状態になる。そして3回目に見つかった場合はついに切除となる。快感を一度覚えてしまうと恐怖はあってもなかなかやめられるものではない。無論、少女たちも隠れて行うのであるが、過剰な性的成長が助長され有害であると謳われているこの行為を保護者達は決して見逃さない。風呂の中やトイレの中まで監視を行い、見つけ出せば娘のために病院へ連行する。数としては多くないが毎月のように陰核を根元から切除される少女がいる。方法や性器の発育具合によっては小陰唇など関連の部位も一部切除される場合もある。

もちろん、自慰行為が有害であるということは小学校の保健の教科書にも明記され、小学校４年生の際に指導される。高学年や中学生になっても折にふれ、自慰行為の有害性は教えられる。また家庭で必ず指導すべきこととして育児書にも多くかかれ、家庭教育ガイドラインにも書かれていた。性欲に満ちあふれている少年少女にとって、この法律の施行はあまりに酷なものであった。

木本沙穂の場合（前編）

木本沙穂が初めて自分の性感に気付いたのは小学校４年生の時だった。それは習い事へ自転車で通っている時のこと。舗装されていない砂利道を抜けて習い事に向かう最中、沙穂は立ち乗りをしてみた。ちょうど股間がサドルの先端にあたり、なんともいえない不思議な感覚を受けた。何度も何度も同じことを繰り返すうち、それは快感へと変化していった。

４年生の時、学校の授業で自らの性について学ぶ。それまで意識したことのなかった自らの股間にある器官の名称を１つ１つ覚えていく。クリトリスというのは性感を得ることに特化した器官であり、将来的に必要となることはあるが日常生活には特に必要がないと教師は言った。そして未成年が快感を覚えることは非常にふしだらなことであり絶対に慎むこと、そして不幸にも快感を得てしまった場合には病院で切除されることもあると教師は脅した。

自分にあの何とも言えない快感を与えているのはこのクリトリスであり慎むべきといわれた快感をすでに自分は知っているのだと沙穂は理解した。切除の話は怖かったが、怖いもの・してはいけないものほど子どもは興味を持つのは今も昔も同じだ。家に帰ると沙穂は制服を脱ぎ捨て、体を曲げて自らの股間を観察した。学校で見た写真とは上下が逆で十分には理解できなかったが、これがクリトリス、これが小陰唇、これが子どもの出てくる膣であると１つ１つ確かめていった。そして指先で優しくクリトリスを触ってみると、自転車に乗っているときにもまして快感を得ることができた。

いけないことだとはわかっていたが、一度覚えたらやめることはできない。時々、下着を脱いでは指先で触れていた。そんなことが母にばれるのは時間の問題だった。ある日、そのシーンを発見した母は即座に病院へ沙穂を連行した。病院では石原という初老の男性医師が待ち構えていた。母と共に診察室へ入った沙穂は下半身を丸裸にされ、ベッドの上で少し膝をたてた状態で座らされ、母の方を向いて股間を広げられた。思春期特有の恥じらいというわけではまだないが、大股を広げている羞恥心と何をされるのかわからない恐怖で沙穂は泣いていた。石原は

「木本沙穂さん、あなたは自分でクリトリスをつまんで快感を得てますね？それはしてはいけないことです」

と冷酷に言った。そして先の細くなったピンセットを手に持つと、包皮の中からクリトリスを器用につまみあげた。神経の集中するクリトリスを金属でつかまれ、激痛を感じた沙穂は激しく泣き出した。そんな沙穂に対して石原は

「今後見つけられた場合はさらに痛い処置を行いますのでよく覚えておいてください」

といい、母にはしっかり監視をするよう求めた。石原によれば、一度快感を覚えたらどんなに脅されてもやめることはなかなか難しく、ほとんどは隠れてどこかで触っているという。母に対して

も、「こんなことを続けていたら不健全に成長してしまい性犯罪にあう確率も高まる」と脅した。そうなっては大変と母は石原の言葉を素直に聞き入れ、どんな場所で行うことが多いのかをこっそり聞き出した。

沙穂はピンセットでつかまれた痛みとさらなる恐怖に、今後はできることであれば控えたいとその時は思っていた。

木本沙穂の場合（後編）

クリトリスをピンセットでつかまれた痛みは、まだ小学４年生の沙穂に自慰行為を忘れさせた。しばらくの間、沙穂はクリトリスを触ることをやめた。自転車に乗っても立ちこぎをしないようになった。

しかし中学受験が本格化していくにつれ、ストレスを感じた沙穂はあの快感を再び思い出してしまった。以前のことから監視を厳しくしていた母にその場面を見つかるのは自然のことだった。小学６年生になってすぐ、布団の中でパンツを脱いでいるところを見つけられてしまった。塾の合間をぬって母は沙穂を病院へ連れて行った。

あの初老の医師、石原が今回も待っていた。前回同様、下半身裸でベッドの上で大股を開かされた。この2年間の間に発毛があった沙穂は前回の時から羞恥心が大分強くなっていた。だからパンツを脱ぐのには大分躊躇したが、石原と母の双方に挟まれ、仕方なく応じた。ベッドの上に立膝で座ると石原は剃刀をもってきて、沙穂の陰毛をそり落としてしまった。まだ薄く生えているだけの陰毛は剃刀を往復させただけですぐになくなってしまう。しかし毛がなくなる以上に沙穂に心痛を与える効果はあった。もっとも剃毛したのは心理的効果だけでなく、これから行われる処置に関係している。再発防止のため、石原は熱くなった医療器具を沙穂のクリトリスにあてた。自分の体でもっとも敏感な部分が焼かれていく気の遠くなるような痛みに沙穂は泣き叫んだ。今回は焼きつぶすことが目的ではないので、軽いやけどをおわせた程度で石原は道具を離した。沙穂は広げられた足をバタバタさせながら抵抗した。今回は最終警告であるが、次回は本当に性感を奪われてしまう。

次の悲劇は中学１年生の２学期末テスト中だった。何とか私立の中学に入学した沙穂は初潮も迎え、１年半前に一度は剃られた陰毛も生えそろい、胸もＣカップのブラジャーがちょうどよくなっていた。確かに大人の女性に成長していた。昨年、クリトリスに熱い道具をあてて最終警告をされてから沙穂はクリトリスに指を触れさせることをやめた。次は本当に性感を奪われるとわかっていたからだ。しかしテスト勉強のイライラから、無性にあの快感を味わいたくなっていた。沙穂は前回のテスト時、良い方法を見つけ出した。それはトイレのビデ機能である。

ビデの水勢を強めてクリトリスにあてると非常に快感を味わうことができるのだ。その日も沙穂は便器にこしかけ、ビデのスイッチを押した。ところが想定外の事態がおきた。いきなり正面の扉があき、母の顔が見えた。木本家ではトイレ不使用時は扉を半開き、使用時は扉を閉めるだけで鍵をかけてはいけないことになっていた。もちろん母が沙穂を監視するためである。そのため沙穂も母の足音には慎重になっていたのだが、この時はあまりの快感で足音に気付かなかったのだ。現場をおさえた母は「冬休みにどうなるかは、自分でわかっているわね」とだけ言い放って去って行った。

数日後、試験が終わった沙穂は両親に連れられ、石原の待つ病院に行った。本当は逃げようとしたのだが、父親につかまり無理やり車で連れてこられたのだ。病院につくと今日はすぐに手術着に着替えさせられた。そして過去に２回来た診察室に入ると、石原はクリトリスの切除を沙穂に通告した。そこで書類作成が行われ、両親も娘のクリトリス切除に同意する旨の署名と捺印を行った。もうどうすることもできない沙穂は観念して押し黙っていた。今できることは

泣くことしかない。自分の迂闊さを恨んだところで何が変わるわけでもない。両親がしっかり見ている前で、沙穂は大股を開いた状態で横たわっていた。石原は大分生えそろった沙穂の陰毛を、すべてそり落としてしまった。その後、しっかりと消毒された。消毒液がしみていよいよ本格的な苦痛が迫ってきていることを感じさせた。

今度は本格的な手術室である。陰毛を剃られてツルツルになった股間に照明があたっている。両足は開いた状態でしっかりと固定されてしまった。もうどんなに暴れようとこのベッドから逃れることはできない。ハンドメスを手にもった石原が現れた。ここからは緻密な作業が要求されるため、まったく無言である。石原は顔色一つ変えずハンドメスをクリトリス包皮に入れた。赤い血と沙穂の激しい悲鳴が噴出した。

まずは包皮が取り除かれ、血まみれのクリトリスが外に出た。その先端部分をクリトリスでつかみ、思い切り引っ張った。そしてその根元にハンドメスが入り、クリトリスの大部分が切り離された。大変しみる消毒を一度施した後、石原は再度メスを持ち、さらに根本の部分を切り落とした。

性感を覚えてしまった少女の行く末はこれである。この時代において若者が性感を得ることは許されない。許されないことをすればこれだけの仕打ちが待っている。

古川香織の場合（前編）

香織が初めて自慰行為を覚えたのは中学受験の時だった。両親によってほぼ強制的に塾へ通わされたのが小学校2年生の時。最初は授業時間も宿題の量もそれほどではなかったが、5年生になって急激に忙しくなった。平日は週に4回塾の授業があり、土曜日は特別授業、日曜日はウィークリーテストというスケジュールだった。家に居るときは母の厳しい監視の下、みっちりと家庭学習をやらされていた。友達と放課後に遊ぶことはできなくなり、趣味の読書すら禁じられてしまった香織は窮屈な思いをしていた。

その日も夜11時過ぎまで勉強をしてようやくベッドに入った香織だったが疲れからすぐには寝付けなかった。扇風機しかない香織の寝室は夏になれば蒸し暑く、寝るにも不快な環境だ。布団は既にはいでいたが、それでも暑いと感じた香織はパジャマを上下とも脱ぎ捨てた。ようやく涼しい風が身体にあたり、不快感が大分和らいだ。香織はパンツをめくり、陰部にも涼しい風をあてた。それが殊の外、快感だった。小学校4年生の時、小学校の授業で性について学んだ。初潮も迎えてなく陰部の発毛もしていない香織であったが、少しずつ自分が大人の女性に近づいている実感だけはあった。近い将来発毛があると思われる恥丘やベールに包まれた大陰唇の中を通り抜けていく風は気持ちが良い。気づけば香織はパンツを膝まで下げ、風をあてていた。最初は扇風機に股間をむけるだけだったが、その快感にひかれ、悪いことだと思いつつ指でそっと性器をなぞった。これが大陰唇、ここがクリトリス、と授業で習ったことを思い出しながら手でやさしく触ると、何ともいえない幸福な気分になる。香織にとって数少ない毎晩の楽しみが出来た。

その快感が突如、悲劇になった。どうやら興奮のあまり、物音がたっていることに気づいていなかったようだ。ドアの外でその音に気づいた母が突然、ふすまをあけて入ってきた。慌ててパンツを上げようとする香織だったが、間に合わない。電気をつけた母はそこにおいてあった教科書を香織めがけて投げつけると凄い顔でにらんで部屋を出て行った。

翌朝、震える足で台所に行くと母はやはり怒っているようだった。学校と塾へ行き、帰ってくると香織の寝室からふすまは取り払われ、リビングから丸見えの状態になっていた。その翌日は塾が唯一ない金曜日で、いつもは学校から帰ってくるとすぐ母の特訓が始まる。しかしその日、家から帰ると母は外行きの格好をしていた。どうしたのかと不思議な目を向けた香織に母は、「出かけるから一緒に来なさい」とだけ言うと車に乗り込んだ。車がついた先は近くの小児科だった。その瞬間、香織は先日の夜のことで病院に連れてこられたことを覚ったが時既に遅かった。言われるまま母の後について病院に入り、順番が来て病室に入った。

母がことの顛末を医師に説明している。この小児科は香織が子どもの頃から何かとあれば治療に来ている町医者である。話を聞いた医師は香織に下半身裸になるよう命じた。どうすることもできない香織は渋々服を脱ぎ、脱衣籠に入れるとベッドの上に乗った。しっかり股間を隠していた両手を看護士にふりほどかれ、手首を握られてしまった。何とか頑張って足を閉じていたがそれも大きく開かれた時、香織は悲鳴をあげた。第二次性徴が始まってないとはいっても恥ずかしい部分が男性医師の前に露わである。足を閉じようと懸命に努力するが、しっかり押さえつけられていてどうにもできない。

その股間に医師が近づくと、看護士から受け取った先の細いピンセットを手にしっかり握った。そしてピンセットでクリトリスの先端の柔らかい部分を包皮の中からつまみだした。そしてかなり力をいれて強烈に引っ張った。

神経が集中する敏感なクリトリスを硬いピンセットで掴んで引っ張られて、香織はついに泣き出した。引っ張られているのはほんの数十秒だったと思うが、香織には永遠にも感じられた。ようやく体が解放され、ゆっくりパンツをはこうとしたが、股間部分に布があたるだけで苦痛だった。その間、医師と母が何か打ち合わせをしていた。

母は無言で香織を連れ帰り、いつものように勉強が始まった。股間が痛んで泣きたい気分であったが、問題が解けなければ更に体罰が待っている。香織は痛みに耐えて勉強に励んだ。ようやく許可が出て就寝できることになったが、ふすまは取り払われてリビングから丸見えである。更にパジャマには紐がとりつけられ、寝る前に母はきつく結んだ。これでズボンを下ろすことも簡単にはできなくなってしまった。快感は惜しかったが、これ以上の悲劇を避けたい香織はこれを機に自慰行為をやめた。

古川香織の場合（中編）

私立中学に無事進学した香織はそこで絵里香という親友ができた。絵里香も同じ一人っ子で、幼少の頃から両親に厳しく育てられてきた。どちらの家も門限が早く相変わらず塾通いの毎日であったが、中学受験をしていた頃よりは少し時間に余裕がある。月に１度か２度ではあるが、香織と絵里香は街でちょっとした買い物をしたりファーストフード店でたわいもない会話の時間を楽しんだ。二人はお互いにとって何でも話せる関係だった。二人にとって千載一遇のチャンスがやってきた。偶然二人の塾が休みの日に、それぞれの両親が用事で外出した。限られた時間であったが、二人は香織の家で課題をこなしながらも楽しい時間を過ごした。香織は思い切って小学生の時に自慰行為が見つかって厳しい罰を受けた話をしてみた。絵里香も同じような体験をしていた。二人にとってこのことを他言するのは初めてである。絵里香が自慰行為を発見されたのは小学校６年生の４月末、トイレの中だった。長い時間トイレにこもっていることを不思議に思った母がドライバーでトイレのカギを開け、自慰行為にふけっている絵里香を発見したのだった。案の定、病院に連れて行かれクリトリスを引っ張られた。しかしそれ以上に辛かったのは、その夜、父にされた体罰だったという。父は年頃の娘の服を脱がせ、靴べらで丸みを帯びてきた尻を何度も叩いた。比較的成長の早かった絵里香は既に初潮も迎え、胸も膨らみはじめていた。そして発毛が見られた股間を実の父に広げられ、ペンチで性器をつかまれて引っ張られたという。あまりの激痛に数日間は風呂にも入れず、パンツをはくこともできなかった。仕方なくノーパンでスカートをはいてすごし、夜は仰向けに寝たといっていた。自分以上の仕打ちを受けたことがある絵里香を見て、香織は不憫に思った。話し終えた絵里香の目には涙が浮かんでいた。絵里香はもう二度としな

いと固く決意していた。

中学1年生の夏休みに、二人が通う中学では林間学校があった。この林間学校では女子校としては珍しく、自らでテントをはって寝袋で寝るという体験をさせていた。香織は絵里香と同じ班になり、他の女子2人と共にテントの中で寝ることになった。しかし元々寝付きがよくない香織である。背中の下はごつごつした石があって実に寝にくい。高冷地とはいえ、真夏は相当暑い。寝付けない香織が隣を見ると、絵里香が小さな寝息を立てている。その姿を見ると、先日聞いた自慰行為の話がよみがえってきた。思い浮かべると香織はたまらなく自慰行為をしたくなってきた。母がいないので、幸いなことにパジャマの紐はしばられておらず、下げることは容易である。寝袋から抜け出るとズボンをさげ、パンツの中に手をいれて自慰行為を始めた。一番出口の近くにいた香織は体を出口側に向け、誰にも見られないように行っていたつもりだった。しかし何とも運の悪いことに、一番奥で寝ていた由依が物音で目をさまし、目撃してしまった。由依は表面的には香織や絵里香と仲良くしていたが、二人に成績で勝つことが出来ず、一学期の期末テストでも順位が下回って母に厳しく叱責されたことから嫉妬と怒りを頂いていた。由依は翌朝、生徒指導主任の教師にそのことを報告した。

50歳を越えて独身の生徒指導主任はオールドミセスとして恐れられる冷酷な女性である。体罰も辞さない厳しい指導は生徒達から恐れられていた。話を聞いた生徒指導主任はすぐさま香織を呼び出し、真相を問い詰めた。本当のことを言えと強要され、ついに香織は白状してしまった。家に帰った後のことを考えると涙がとまらない香織であったが、皆に知られたくないので、トイレで一人涙した。事態に気づいた絵里香がいたわってくれたが、時既に遅しである。

案の定、生徒指導主任は香織が帰宅する前に一部始終を母に話してしまっていた。林間学校から帰宅した香織はその足でいつもの病院へと連行された。今回はお灸がすえられると聞いていた。

前回同様、下半身の衣服をはぎとられ、ベッドに寝かされた。今回は処置が重いので、押さえつける看護士の数も多い。上半身を一人、下半身を二人にしっかり固定されてしまった。まもなく焦げるような臭いが漂ってきた。次の瞬間、股間付近に熱さを感じた香織は体を硬くした。

震える香織に構うことなく、高温のもぐさは香織のクリトリス付近へと強くあてがわれた。その瞬間、香織は脳天を突き抜けるような暑さにかすれた声をあげた。しかしそれは地獄の始まりにすぎない。1秒・2秒と段々熱さが伝わってくる。力の限り泣き叫ぼうと声をあげた香織の口に詰め物が突如、おしこまれた。声にならない声をあげて抵抗するが無駄だった。焼きつぶすことが目的ではないので、10秒ほどで押しつけは終わった。しかし香織がおったやけどの傷は決して少なくない。

その傷が癒えるまで、絵里香が言っていたようにパンツをはくことも風呂に入ることもできなかった。香織は自分のうかつさを嘆いたが、あとのまつりであった。

古川香織の場合（後編）

中学1年の時、クリトリスを焼かれた強烈な痛みは香織に自慰行為の快感を諦めさせる効果が大いにあった。数日間は排尿をするだけで傷口がしみて涙が出た。友人同様、私もこれ以上やらないことにしようと決意した。

林間学校を終えると香織にも発毛が見られた。まな板だった胸もようやく、少し主張するようになってきた。１０月には初めての月経も迎えて、少しずつ大人の体に変化していった。変わらないのは母の厳しい監視であり、寝る時は相変わらずパジャマを紐できつく縛られていた。時々はあの快感が恋しくなったが、次に見つかったらクリトリスを根元から奪われ、二度と体感することはできなくなってしまう。それなら今はじっと我慢し、二十歳を過ぎて自由になったら大いに楽しもうと考えた。

実際それから2年、家でも学校行事でも香織は自慰行為をやめた。トイレの中で行うことも親友の苦い経験談を聞いていたのでやめた。正確にはたった2回だけ、塾のトイレ内で行ったことがある。誰かに見つかれば密告される可能性は十分あるので、全ての個室に人がいないことを確かめ、音を決してたてないよう気をつけて行う。もちろんパンツにシミなどつければ観察眼の鋭い母にすぐ見つかってしまう。

悲劇は突然訪れた。中学3年生の初秋、香織はいつものように風呂

に入っていた。体を洗うべくシャワーのスイッチをいれたところ、曲がっていたようで、明後日の方向にシャワーが噴き出した。それが偶然、香織の股間を直撃した。忘れていたあの快感が再び蘇る。ぬるま湯で至近距離から水勢強めで刺激すると何とも気持ちが良い。温度や水勢などを変えながら、至極の時間を楽しんだ。さすがに毎日はやらなかったが、週に何回かは風呂場で快感を楽しんでいた。しかし勘の鋭い母は1ヶ月もたたないうちにこの行動を発見してしまった。シャワーの音と快感に身を委ね、香織の警戒心が薄れていたのだ。慌ててやめようとしたが、シャワーを股間にあて、目を閉じて天井をぼーっと見ている行動に言い訳は出来ない。青ざめる香織をよそ目に母は、「居間で待っているからね」とだけいって立ち去った。

少しでも早く行った方がまだ怒りを抑えられる。香織は急いで風呂を出ると下着もつけずバスタオルのまま居間へ向かった。想定外のこととして、居間には父も待機していた。足がすくんで前に進めない香織に対し、母は「今、何やってたのかお父さんにも自分で説明しなさい」ときつく命じた。香織は消え入りそうな声で「・・・自慰行為を・・・」と答えた。「もっと大きな声でいいなさい」母が追い打ちをかける。ついに香織は泣き出し、「本当にごめんなさい。自慰行為をしてしまいました。二度としませんから今回だけは許して下さい」とすがった。

そんな香織に構うことなく、まず父がバスタオルを外すよう命じた。裸を父に見られるのは小学校低学年以来だろうか。同級生の中でも比較的成長した胸を左手の腕で、そして股間を右手で何とか隠した。しかし父は香織を居間に仰向けに寝かせると、手をふりほどいて足も大きく広げてしまった。顔を真っ赤にして抵抗する香織だが父の

力の前にはどうにもできない。ハサミを受け取ると綺麗に生えそろった陰毛を切り落としてしまった。途中で剃刀に持ち替えたりまたハサミを使用したりしながら、下腹部にあった毛も女性器回りの毛も全て取り除いた。これ以上抵抗すれば刃物でそのまま性器を切除されかねない。香織はじっと耐えていた。ふいに父は「こんなもの・・・」と言いながらクリトリスを左手でつまみ、強烈に引っ張った。右手に持ったハサミがクリトリスの先端に触れる。

「今ここで切り落としてもいいのだが・・・」という父の言葉に許されるかと一瞬期待した。しかし次に出てきた言葉は、「先端だけとか中途半端な形でなく、根元の部分もなるべく切ってもらえ、明日病院につれてけ」という過酷なものだった。大泣きして許しを請う香織の頬にビンタを喰らわせると両親は行ってしまった。全裸の香織は服を身につける意欲もなく、ひたすら泣いた。

翌日連れて行かれたのはいつもの病院ではない。母が紹介状をもらってきて設備の整った大きな病院での切除を予約した。理由はただ一つ、クリトリスの根元から切り小陰唇の大部分も除去してもらえるからだ。普通の場合は、クリトリスの大部分を切るだけであるが、特別に希望すればこのような処置も可能だ。

しっかり体を固定された香織は、まずクリトリス包皮にメスを入れられた。続いて小陰唇の大部分を、そして最後にクリトリス本体を埋まっている根元から取り除かれた。勿論麻酔はせず、激痛の中の手術であった。技術の進歩により、先端部分を切り落とされただけのクリトリスなら将来的に再生することも可能だ。しかしここまで切り取られてしまえばもう再生はほぼ不可能ということだった。